

進化宣言!
電撃文庫
FIGHTING
フェア
コラボ企画

電撃文庫×電撃 G's コミックの
スペシャルコラボ第1弾!
ネトゲがメディアミックスしない
などと誰が決めた!
あの『ネトゲ』が、
ゲーム化……だと!?

女のネトゲ嫁 は 思ってた? 番外編



聴猫芝居
illust:Hisasi

学校の床は汚い。
それに冷たいし、触ると硬い。
でも時にはそこで正座をすることだってあったりする。
「いいか、アコ」
「はい」
冷たくて硬いリノリウムの床の上。
部屋の床で正座をした俺の前には、同じように正座をしたアコが居た。

「俺だって何度もこんなこと言いたくないんだよ。そろそろわかってくれてもいいだろ」
「うう、そう言われましても」
しよんぼりとしたアコが上目遣いでこちらを見つめる。長い髪に隠れてるけど、よく見ると驚くぐらいに可愛いもんだから、こうして凹んでると思わず許しそうになるけど——騙されちゃだめだ。
俺に怒られたから落ち込んでいるのであって、多分こいつは反省してない。
「でも、だって……今日は二人で居ましょうねって約束したじゃないですかっ！」
「ゲームでな！ ネットゲの中でな！ リアルの話じゃなくてな！」
ほらやつぱり反省してないし！

「一体何があったのだ」
「授業が始まってアコが自分のクラスに帰らなかったのよ。どうしたのかと思ったら、西村と『今日は一緒に居る』って約束したとか言い張って」
「そ、それは痛ましい……」
マスターからの視線が優しく、むしろ心に痛い。

部活の前に反省してもらおうと話を始めたもんだから、マスターも瀬川も生暖かい目で俺達を見守ってる。
「昨日一緒に居られなかったから今日は一緒に居てくれるって、ルシアンがそう言ったんじゃないですかしようと言うのか！」
「あんた、めでいあみつくしゅって言いたいだけじゃないの」
「瀬川、もしかして今囁んだんじゃ」
「囁んでない」
「……優しい顔でこっち見んな！」
「なんだその切れ方は」
理不尽に怒られた。

こっちは素直に頷いたつてのに、瀬川はむしろ照れた様子でばたばた手を振った。
動きに合わせてびよんびよんとツインテールが揺れる。なんか連動してるみたいだな。
「で、L Aがメディアミックスって、具体的に何をやるの？」
「映画ですか？ ドラマですか？」
凄く期待した顔してるアコには悪いけど、その二つは確実にありえないと思う。

ネットゲのドラマとかどうすんだよ。
ネットゲ廃人の半生を追ったドキュメンタリーの方がまだしも現実味あるぞ。
絶対見たくないけど。リアリティありすぎて怖い。
「うむ。内容については公式ページで発表があったのだが——」
と、何故かマスターが俺を指した。
「ここで問題だ。メディアミックスの内容とは、何だと思う？」
「問題にされても困るんだけど……そうだなあ」
わざわざ発表しようっていうんだから、公式アンソロジーとかじゃないだろうし。
すると思いつくのはアニメ化かゲーム化かって所かな。その二つだとありそうなのは——

「……」
「一部分だけ抜き出して言うのやめろ、俺が酷い奴みたいに関こえるから！ 昨日はフレンドと狩りに行ってアコと遊べなかったから、今日は一緒に狩ろうかってだけの話だったろ！」
それがどうなったら一日一緒に居る約束になっちゃうんだよ。
学校があるだろ、学校が。

「せめて学校以外ではずっと一緒に居たい、ぐらいなら可愛げがあるのに」
「それはいつものことじゃないですか、夫婦なんですから」
「言われてみたらそだな」
学校から一緒に帰って、帰ってきたらゲームの中一緒だ。
アコの見たらずっと一緒にいたいなもんかも。
「……つまり俺とアコはもう少し距離を置いた方がいいのかもしれない」
「お別れのテンプレじゃないですか！ り、離婚ですか!? 嫌ですよ、私は断固拒否しますっ！」
「そもそも結婚してないし……」

アコは夫婦だとか言ってるけど、まさか本当に結婚してる訳ない。
俺達はただネットゲの中で結婚したってだけなんだから、アコはゲームで結婚してるんだからリアルでも夫婦！ って言い張ってる。
その辺がまともになつてくれれば、俺の青春はもう少し華やかになるはずなのに。
「あんなアコ、ネットゲはネットゲなの。ネットゲの設定はどうやつてもネットゲの中から出てこないんだよ」
そんなこんなでアコの教育を頑張る毎日だ。

瀬川もマスターもそれに協力して、こうして一緒に



「ならゲームじゃないかな。ネットゲがオフラインのゲームになるってよくある話だし」
「おお、正解だ！」

どうも当たったらしい。そかそか、ゲーム化か。まあ無難だよな。ネットゲなんだから親和性はあるし。「ゲーム名はレジェンダリー・エイジ・オフラインだ」
「そのまんまね」
「わかりやすくいいじゃないですか」
そうそう、わかりやすいのが一番。
オリジナルっぽいタイトルだけど実は原作があるゲームって、時々騙されたりするしね。
「マルチプレイは搭載してんの？」
「フレンドの力を借りられる程度で、ほぼオフラインだな」
「……なんでわざわざネットゲをゲーム化したのにオフラインゲーなのよ」
つまんなー、と顔全体で表現する瀬川。

「……そんな呆れた顔して言うもんじゃないぞ。ネットゲしたいならL Aやればいいじゃん」
「……それもそうね」
そういうことです。別ジャンルで出すんだから、むしろメインの客を奪い取らない方が大事なんだろ、多分。多分ね。
「というわけでルシアン、問題に正解した賞品はこれだ」と、目の前に携帯ゲーム機が置かれた。
「……え？」

あの、どういうことです？
疑問を口にするまもなく、マスターがさらに動く。

部活に来てくれてるんだけど——。

「そんなことはないぞ？」
「……え？」
今日はマスターが、妙なことを言い出した。
「ネットゲの設定が外に出てくることはあるぞ」
「ありますよねっ？ むしろ何の無いありませんよね!?」
「ちよつ、マスター、アコが一気に調子乗ったから！」
正座から急に立ち上がったから生まれたての子鹿みたいにぶるぶるしてるし！
大丈夫かアコ、転ぶなよ！

「どういう意味？ なんでネットゲの設定が外に出るの？」
震えるアコの膝をつつきながら言う瀬川に、マスターは大きく頷いて言う。
「実はだな、L Aがメディアミックスをするそうだし」
よくわからないことを言い出した。
メディアミックスってあれか？
コミカライズとかノベライズとか、アニメ化とか、なんかそういう奴？
「メディアミックスって……いや、L Aってネットゲじゃん」
「ですよねえ」

L A——正式名称レジェンダリー・エイジは、俺達のプレイするMMORPGの名前だ。
なんでネットゲがメディアミックスするんだよ。どういうことよ。
不思議に思う俺とアコに、マスターはさらに意気込んで言う。
「何を言うか！ ネットゲがメディアミックスしないなどと誰が決めた！ むしろ今をときめくオンラインゲームがメディアミックスせずには何をメディアミックス

「副賞として二人にもやろう」
アコと瀬川にも携帯ゲーム機が。
「びーたですよびーた！」
「びーたちゃんだなあ……」
仰る通り、びーたちゃんの箱だった。
ぱっと見てわかる、箱に入った新品のゲーム機。これ結構なお値段がするよな？
アコはサンタさんでも来たみたい喜んでるけど、配るようなもんじゃないだろうに。
「マスター、何だよこれ」
「何だも何もなろう」
ふふんと自慢気に言うと、四本のソフトをびっと取り出した。

「これがそのゲームだ！」
「どうしてここにあるの!？」
「発売日は今日だ」
「早っ！」
だからこんな話したのかよ！
俺らが発売に気づいてないから、こっそり用意して驚かしてやろうと!？」
「それでわざわざ全員分用意したわけ？ あたし達が使っていないの？」
「うむ。最近は携帯機でのマルチプレイ対応ゲームが増えている。現代通信電子遊戯部として手を出さぬわけにはいかんだろう」
一応ネットゲ部だもんなあ。
コンシューマーにも携帯機にもネットゲはある。
機体がないから手を出さないけど、興味はあるし……。

「じゃあ一旦借りるよ」
「うむ、好きに使え」
借りるだけだと言うに。

西村英騎 Hideki Nishimura



Character Status

現実の西村：趣味はゲーム、クラスではオープンオタクという、つまりよくいるお前ら。
ネット上のルシアン：防具至上主義のアーマーナイト(♂)。つまり盾。

「んじゃさっそくやってみるわよ！」
 意気揚々と瀬川が箱を開ける。
 「ルシアンルシアン、スイッチどれですか？」
 「そこからか、お前は」
 人に頼らず説明書を読みなさい。それから、びーたちちゃんを見せるついでに体を押し付けてくるのやめなさい。嬉しくなつちゃうから。
 「特典アイテムの引き換えコードもあるぞ、後でログインして入力しておけ」
 「あ、やつはあるんだ」
 「当然だろう。ゲーム連動イベントもあるぞ」
 「その方が売れるしな」
 あざといけど、そうやって盛り上げていくのは嫌い

じゃなかったりする。
 損得抜きに盛り上がるのも楽しいけど、利益を得るために頑張るのもそれはそれで楽しいし。
 「起動したわよ……ふふっ」
 いち早くゲームを始めた瀬川が、いきなり吹き出した。
 「おい、なんだその変な笑い」
 「あんたも起動してみなさいよ、すぐわかるから」
 「ちよつと待ってよ」
 むふふと妙な笑い声を漏らす瀬川に続いて俺もゲーム機を起動する。
 Wi-Fiにつないで、ログインしてつと。
 「ゲーム起動……ログが出て……初回アップデートが……ぶっ！」
 なにこれ！ 発売初日なのに、初回起動なのに、で

っかいパッチが来る！
 ダウンロード残り数字が全然減らねえし！
 「なんでオフラインのゲームで巨大パッチ落としてんだよ！」
 「あたしも余りにネットがらしくて笑っちゃって」
 「ダウンロードが進みませんよう」
 こんな所にネットの要素を持ち込まなくていいのに！
 こりゃ始めるのにしばらく時間がかりそうだなあ。折角ならこっちのゲームもやりたかったんだけど。
 「今日はみんなでL/Aやりますか？」
 「それも手だなあ」
 携帯ゲームだし、一人で暇な時にでもやればいいかなと思っただけだ。
 「早めにクリアしたほうが良いと思うぞ？」
 マスターはそう言って、ぼんぼんとゲーム機を撫でた。「そりゃなんでまた？」
 「進行情報とクリア特典があつてだな、一定日数以内にクリアするとオンライン側でアイテムが貰えるのだ」
 「何その謎な特典！」
 アイテムが欲しかったら強制的にタイムアタック!? そんなこと言われたらやるしかないじゃん！
 「しかもそういう特典があるつてことは中古で売れないわけね」
 「特典コード使用済みでは値段が下がるだろうからな」
 なんでこう、特典とかボーナスについて話すマスターはやたらと嬉しそうなんだろ。
 ま、こうなったら逃げられない。
 手元にソフトがあるのに、他のやつが持つてる特典がもらえないなんて悔しいじゃないか。
 ログインしたはずなのにログイン特典をもらい忘れたいの悔しさだ。

「今のうちに説明書でも読むか」
 「あ、キャラクターに私が居ますよ！」
 「アコじゃねえよ」
 説明書には見慣れたキャラクターがドット絵になって表示されてる。
 どうも横スクロール型のアクションゲームらしい。意外と面白そう。
 「私はクレリック使います！」
 アコはぐつと両手を握った。アコだしな、それ使うよな。
 「ならやつは俺は盾かなー」
 「大剣で火力にこだわるべきでしょ」
 「やはり魔法が浪漫ではないか」
 相変わらず好みの分かれる面子だ。
 やる分にはその方が面白いくさ。

効率面で考えると火力があるやつを相棒キャラにした方が楽だから……。
 「じゃあ俺はシユー相棒でいくか」
 「なんで私じゃないんですかああああつ！」
 うおお、しがみつくなしがみつくな！
 つていうか半泣きでしがみつくなことか!?
 「だつてお前、盾とヒーラーで組み合わせようすんだよ、火力はどこから出てくるんだよ」
 「なんとかなりますよ！」
 「お前の大嫌いな精神論が出てるぞ」
 やればできる、とかそういうの。
 やつてないけど、多分やつてもできないから一緒だよね、という派閥の俺達にとっては敵な考えじゃないか。
 「これは精神論じゃなくて感情論です！」

そつちは許せるのか。都合が良いなおい。
 「パートナーって大事なんですから、ちゃんと考えましょう！ 私よりシユーちゃんの方が好きなんですか!?」
 俺の腕をつかんでがつくんがと揺すりながら言うアコ。
 「いや……そんなことはないけど」
 「でしようっ!?」
 相棒って意味では瀬川の方がふさわしい気はするけど。そもそも仲間を比べる気もないし。
 ただ好き嫌いで言うならそりゃアコかな——つて思つて言つたら、何故か瀬川がちよつとつむいた。
 「西村には何の興味もないけど、心底どうでもいいけど、それでも冷たく言われると悲しいものがあるわね……」

「あ、オンライン上のフレンドからパートナーを選べるんですね」
 「最終的にそのキャラとのエンディングになる、と説明書に書いてあるな」
 NPCとかフレンドのキャラとか、そういうのと仲良くなれるタイプのゲームか。
 意外とNPCに良いキャラが居たりして、何ルートもやりたくなるんだよなあ。
 「ということは！」
 アコはぐつと両拳を突き上げて、コロンビアとかそんな文字が見えそうなポーズで言う。
 「ルシアンルートがあるんですか！ これは時代が来ましたね！」
 「何の時代だよ!?!」
 来ないに越したことないよ、そんな時代！
 まったくこいつは、と思ひながら俺も相棒を考えてみる。

玉置亜子 Aco Tamaki



Character Status

現実の亜子：ルシアンラブのひきこもり。最近はちゃんと学校に来ている。
ネット上のアコ：ルシアンラブのクレリック(♀)。見た目重視、すごく可愛い、でもよいい。

「そこでお前が凹むの!？」
「なんかこう、好きでもない相手に向こうから振られた時に生まれる謎の感情があたしの中に生まれるのを感じるのよね……」
あああ、それわかる!

「理不尽すぎて滅茶苦茶腹立つんだけど、それと同時になんか悔しいの!」

「い、いや違うから! お前はほら、結構モテてるっぽいし! クラスでも真ん中の方に居るし! 俺からは高嶺の花かな、みたいなのがあって!」
「妻の目の前で他の子を口説くのやめてくださいっ!」
「口説いてねーっ!」

「ここでアコに怒られたら逃げ場ねえじゃん!」
俺にどうしろっていうんだよ!

「お世辞でもそう言われるとなんか嬉しいかも」
そこで機嫌良くなるとアコが怖いから!

「間を取って私の火力を活かせばよかるうに」
「だーめーです!」
なんだかんだで俺はアコのキャラをパートナーにすることにした。

盾とヒーラーのノーダメージコンビだけど、アクションゲームの盾って上手く立ち回ればほとんどダメージ受けなかつたりするし、頑張ればいけるかな。
「探めている間にバッチのダウンロードが終わっていないぞ。始めるとしよう!」

「んじゃ進めるわよー」
「んじゃ進めるわよー」
キャラクターを選んで、ゲームスタート。
ミニストーリーの後に一面のステージが始まった。
「お、一面はロードストーン南の草原か」
通称ロード南、レベル1とか2で戦うマップだ。
やわらかいスライム型モンスターのぼわりんとか、小さな喋りかいた平和なマップ。

「音楽もロード南のアレンジで良い感じだ。
「こういうのやっていると、どうしてもテンションがっちゃうんだよね」
「ネットゲのゲーム化、侮れないわね」
少し進むと、見られたモンスターがびよんびよんとこっちに飛んできた。
「ぼわりんがいますねー」
「こんなの一発切れれば……し、死なないっ!」
咄然とした瀬川。俺の方でも盾で殴ってみるけど……。
「意外と硬いな、ぼわりん」
「叩いても倒せませんー!」
「レベルが上がるまでファイアーボールしか使えないのだが……水属性のぼわりんをどうしろと言うのか……」
全員があんまり楽勝とはいえないスタートになっている。マゾゲーであるネットゲの長所を活かしてか、意外とシビアなゲームらしい。
「おかしいわよ、普段なら素手でも余裕なモンスターなのに」
「お前のシュヴァインはレベルいくつだと思ってるんだよ」
オフラインのキャラクターはまだレベル1なんだから。「ダメージを受けても自分で回復できるのでクレリックは楽ですよ」
「俺もアコが出てきて回復してくれるから結構楽だけだよ」
「ですよ、私を選んでよかったですよね!」
「プレイしにくいからひつつかないでくれ」
「どうせ後から回復してるだけじゃ間に合わなくなるよ」
「一撃即死の未来が見えるようだな、ふっふっふ」
想像できるから言うのやめてくれ。」

「それでも俺とアコはこの組み合わせでクリアするしかないんだから。
この日の部活はそれぞれがゲームをしたままで終わった。」

「それでも俺とアコはこの組み合わせでクリアするしかないんだから。
この日の部活はそれぞれがゲームをしたままで終わった。」

「それでも俺とアコはこの組み合わせでクリアするしかないんだから。
この日の部活はそれぞれがゲームをしたままで終わった。」

「それでも俺とアコはこの組み合わせでクリアするしかないんだから。
この日の部活はそれぞれがゲームをしたままで終わった。」

「それでも俺とアコはこの組み合わせでクリアするしかないんだから。
この日の部活はそれぞれがゲームをしたままで終わった。」

「それでも俺とアコはこの組み合わせでクリアするしかないんだから。
この日の部活はそれぞれがゲームをしたままで終わった。」

「それでも俺とアコはこの組み合わせでクリアするしかないんだから。
この日の部活はそれぞれがゲームをしたままで終わった。」

「それでも俺とアコはこの組み合わせでクリアするしかないんだから。
この日の部活はそれぞれがゲームをしたままで終わった。」

「それでも俺とアコはこの組み合わせでクリアするしかないんだから。
この日の部活はそれぞれがゲームをしたままで終わった。」

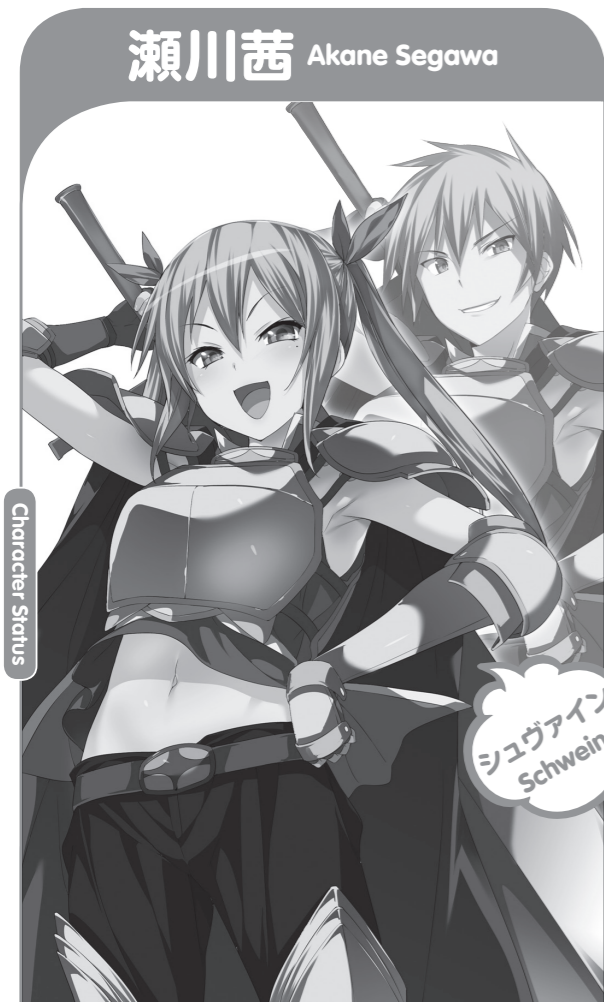
「それでも俺とアコはこの組み合わせでクリアするしかないんだから。
この日の部活はそれぞれがゲームをしたままで終わった。」

「それでも俺とアコはこの組み合わせでクリアするしかないんだから。
この日の部活はそれぞれがゲームをしたままで終わった。」

「それでも俺とアコはこの組み合わせでクリアするしかないんだから。
この日の部活はそれぞれがゲームをしたままで終わった。」

「それでも俺とアコはこの組み合わせでクリアするしかないんだから。
この日の部活はそれぞれがゲームをしたままで終わった。」

「それでも俺とアコはこの組み合わせでクリアするしかないんだから。
この日の部活はそれぞれがゲームをしたままで終わった。」



現実の瀬川：かわいいからモテるけど、実は隠れオタ。必死で隠してるけど「こっち」寄り。
ネット上のシュー：火力至上主義のソードダンサー(♂)。らんらん(´ω´)

「それでも俺とアコはこの組み合わせでクリアするしかないんだから。
この日の部活はそれぞれがゲームをしたままで終わった。」

「それでも俺とアコはこの組み合わせでクリアするしかないんだから。
この日の部活はそれぞれがゲームをしたままで終わった。」

「それでも俺とアコはこの組み合わせでクリアするしかないんだから。
この日の部活はそれぞれがゲームをしたままで終わった。」

「それでも俺とアコはこの組み合わせでクリアするしかないんだから。
この日の部活はそれぞれがゲームをしたままで終わった。」

「それでも俺とアコはこの組み合わせでクリアするしかないんだから。
この日の部活はそれぞれがゲームをしたままで終わった。」

「それでも俺とアコはこの組み合わせでクリアするしかないんだから。
この日の部活はそれぞれがゲームをしたままで終わった。」

「それでも俺とアコはこの組み合わせでクリアするしかないんだから。
この日の部活はそれぞれがゲームをしたままで終わった。」

「それでも俺とアコはこの組み合わせでクリアするしかないんだから。
この日の部活はそれぞれがゲームをしたままで終わった。」

「それでも俺とアコはこの組み合わせでクリアするしかないんだから。
この日の部活はそれぞれがゲームをしたままで終わった。」

「それでも俺とアコはこの組み合わせでクリアするしかないんだから。
この日の部活はそれぞれがゲームをしたままで終わった。」

「それでも俺とアコはこの組み合わせでクリアするしかないんだから。
この日の部活はそれぞれがゲームをしたままで終わった。」

「それでも俺とアコはこの組み合わせでクリアするしかないんだから。
この日の部活はそれぞれがゲームをしたままで終わった。」

「それでも俺とアコはこの組み合わせでクリアするしかないんだから。
この日の部活はそれぞれがゲームをしたままで終わった。」

「それでも俺とアコはこの組み合わせでクリアするしかないんだから。
この日の部活はそれぞれがゲームをしたままで終わった。」

「それでも俺とアコはこの組み合わせでクリアするしかないんだから。
この日の部活はそれぞれがゲームをしたままで終わった。」

「それでも俺とアコはこの組み合わせでクリアするしかないんだから。
この日の部活はそれぞれがゲームをしたままで終わった。」

「それでも俺とアコはこの組み合わせでクリアするしかないんだから。
この日の部活はそれぞれがゲームをしたままで終わった。」

「それでも俺とアコはこの組み合わせでクリアするしかないんだから。
この日の部活はそれぞれがゲームをしたままで終わった。」

「それでも俺とアコはこの組み合わせでクリアするしかないんだから。
この日の部活はそれぞれがゲームをしたままで終わった。」

「それでも俺とアコはこの組み合わせでクリアするしかないんだから。
この日の部活はそれぞれがゲームをしたままで終わった。」

「それでも俺とアコはこの組み合わせでクリアするしかないんだから。
この日の部活はそれぞれがゲームをしたままで終わった。」



Character Status

現実の御聖院：理事長の娘で生徒会長というハイスペックお嬢様！ でも友達が少ない。
ネット上のリーダー：ルシアンたちの所属するギルドのリーダー。廃課金厨の魔法使い（♂）。

とか言ってる人よくいますよ

◆ルシアン…ネトゲしながらソシヤゲすんのも駄目！
ネトゲをやっている最中に他のことをするなんて、ネットゲームの風上にも置けないやつらだ！ そんなことで立派なネトゲ廃人が名乗れると思ってるのか！

ええ名乗れますね！ むしろゲーム画面はついでで
他がメインになってからが廃人のスタート地点ですね！
つまり要するに！

◆ルシアン…俺だけできないのズルイぞ！
◆シユヴァイン…そこか責様

仲間外れは格好悪いぞ！
お前らが遊んでるなら俺だって遊びたい！

「そういうのは自分でやれよー」
「いいじゃない、先の敵から素材取ればバスタードソードにランクアップできるのよ。これがあればどうせ勝てるんだから、後か先かの問題よ」
「そういう寄生精神は良くないぞー」
自分で進んで手に入れるからこそ愛着も持てるし達成感もあるんだよ。

「バツンはバイオスライムを倒せて初めて使いこなせるんだぞ。それにさ、お前はその辺のゆとりゲーマーとは違うだろ。やればできるんだから」
「むー、じゃあもうちょっとやってみるけど」
俺も何度も死にながら練習したからな。

スライムだからガード不可能って意味わかんなかったし。ネトゲの中に居る本家のバイオスライムはリフレクトガードもオートガードも効くじゃん。
「ルシアンルシアン、私もバイオスライム倒せないんですー！」
と、アコまでそんなことを言い出した。

「しょうがないなあアコは。」
「倒せないのか？ ちょっと見せてみる」
「ちよっ、あたしと対応違うくない!?」
あれ、なんか瀬川が怒りだした。
何かおかしなことでもあっただろうか。
いやごめん、あったけどね、わかってるけどね。
「だってアコだし、しょうがないじゃん」
「しょうがないわよ！」
「しょうがないって。」
「だってこいつゆとりゲーマーだし」
「ゆとりですー！」

俺がぼんと頭に手を置くと、アコは自慢気に頷いた。
自信満々で言うな馬鹿。
「ハンターランク試験はキャンプで待ってたら突破し

◆ルシアン…いいかお前ら、オフゲーは終わってからにするんだぞ、お兄さんとの約束だ

◆アコ…すいません、ボス戦なのでちよっと待って下さい

やんなったろうが！

翌日。

「眠いわねえ……」

「だな……」

「うむ……体調管理を怠るとは、不覚だ」

全員が寝不足全開の表情で部屋にやってきた。

「保健室のベッドでもう少しやわらかくして欲しいですよね？」
訂正、一人元氣な奴がいた。

てるものですよね」

「この子もう駄目だわ」

こうなったら終わりだぞ。

俺達は反面教師として頑張っていこう。

「大体アコ、俺はお前の代わりにクリアしてやるわけじゃないぞ」
「ふえ？」

「お前がクリアできるまでマンツーマンで指導するだけだ」
「えええっ」

俺の言葉にしばし固まった後、アコは氣を取り直したように頷いた。

「でもルシアンとマンツーマンなら頑張りますー！」

こういう所は可愛いんだけどなあ、アコ。

まあいい、倒せないのなら倒せるまで挑ませるのみ！

「よろしい、では始めるぞー！」

「はい教官！」

「あんたら楽しそうね……」

白い目で言う瀬川。楽しそうだろ。見た通り楽しいぞ。

「よし、十面クリア」

「マスターは無言で先に進みすぎなのよ！ 歩調合わせなさい！」

++++

++++

++++

そしてついに、俺達は最終決戦の時を迎えていた。

「そこで私を呼ぶのだ。ルシファアのメテオはバーフエクトブリーダーで打ち消せるぞ」

「はいっ」

「練習発勁は避けられないからパートナーの俺で防げ。八割減だからヒールでまかなえる」

「はいいいっ」

こいつ、またやりやがった！

「だから！ 眠いからって！ 保健室のベッドに逃げると言ってるのに！」

「校内で数少ないオアシスなんですよう、ちよっとぐらい良いじゃないですか」

俺達は眠いのを我慢して授業に出てたつてのに。

元不登校生徒はこういう時に有利だから困る。

「俺は他の奴より進行が遅れているから進めるしかなかつたけど、みんなは待っていてくれても良かっただろ」

「でもフレンドのレベルが見えてるし……西村に追いつかれそうだし……」

「追い付かせろよ」

「マスターの威厳を見せねばなるまい。負けるわけにはいかないのだ」

「そんな所にプライド持たなくてもマスターは立派にギルマスだから」

追いついたら止めるつもりだったのに、逃げるから俺まで止め時を見失っただろ。

「ルシアンルートを駆け抜けたいんです」

「お、おう」

そしてアコの目はマジだった。

お前が俺にだけ本氣を向けるのが凄く怖い。

「進むほど火力不足が深刻化して、そろそろ差がつきそうだったのに……バイオスライムとかやたらと苦戦したんだぞ」

「えっ、西村、八面のバイオスライムもう終わったの？」

「ああ。ガー不の攻撃多いけど、逆に見やすいから結構簡単に避けられた」

「本当!? ちょっと代わって！」

代わってってなんだ代わってって。

と思つたら本当にゲーム機を押し付けられた。マジで代われと言うのか。

「発勁の後は隙があるからゲージ貯まったらあたし使つてらんらんして。一発で一割もつてけるわよ」

「わかりましたっ」

「ほら、デヴィヴァインセイバーちゃんと入れろ！ 三発入れたら体勢崩すぞー！」

「大技の前はエクダメちゃんと入れないと駄目よ！ ネットゲのL/Aと一緒にしよ！」

「今の隙だ！ 回復を挟め！」

「ふええええっ」

そんな熱血指導の結果。

アコの持つびーたちちゃんに映っていた大ボス、ルシファアはゆつくりと地面へと倒れ伏した。

「倒しましたー！」

「っ、ついにやったわね！」

「長く苦しい戦いだった……」

本当に長かった。

まさかこんなにかかると思わなかった。

「俺達全員がクリアしてから、アコがラスボスを倒すまで何日かかったんだ……」

「どうしても自分で倒せてみんなが言うからっ」

感動なのかプレッシャーなのか、目に涙まで浮かべたアコ。

ほらほら泣くな泣くな。

「でもなー、自分でやらなきゃ意味ないしさ」

「その分もらった特典にも愛着が持てるってんでしょ」

「それは……そうですね、こんなに頑張ったの初めてですから」

人生で一番頑張ったのがゲームです、というのはいかなものか。

「我々の全員が、人生で一番本氣になっているのはネットゲームだぞ」

「駄目人間しか居ないわね」

お前もだぞ瀬川。

結局こうして本気になったのも、クリアしたらネットゲで特典アイテムがもらえるからだし。

「ネットゲしか頑張れないんじゃないだろうか俺達。」「んじや一緒にコード入れましようか」

「そだな、最初の目的だし」
「一週間近くかかっちゃいましたけど、ちゃんともらえますか?」

「問題なからう。コード入力ページを開いてみる」
ええと、この画面のコードをパソコンに入力、と。
「これで送ればあたしのイベントりに……あれ?」

瀬川が変な声を上げた。
同時にこちらの画面にも変な文字が。
黒い大文字で——コード受付停止中?

「な、なんでですか?! もう期限切れですか?!」
「そんな、まさか、早すぎるだろ!」
「一週間で認めないということはなからう。まさか!」

キーボードを叩くマスター。
数分の後、ゆっくりと息を吐いて言う。
「……そうか、やはりか」

「なんだったんだ? 何か問題でも?」
「これだ」
マスターはぐいっとモニターをこちらに向けた。
それはLA公式ページ、緊急お知らせの項目。

「チートによるコード発行についてのお知らせ……チートかよ……」
「ああ、なるほどね……」
「……ちいと? どういうことですか?」

「……ちいと? どういうことですか?」
「……ちいと? どういうことですか?」
「……ちいと? どういうことですか?」
「……ちいと? どういうことですか?」
「……ちいと? どういうことですか?」

ならそれでいいんだけど」

「うむ、大人気御礼につき、大型アップデートも計画中だぞうだ」

「そりや何よりだ」
「一人で四本買ったマスターも浮かばれるわね」
「死んだように言うな、私はまだまだ買い支えるぞ」

「ありがてえ、ありがてえ、
こういう人のお陰でサーバーは維持されてるんだ。
それにイベントだけではない。LAは随分と若返った。少し町を歩いて見ればわかるだろう」

「どういうことですか?」
「ちょっと見てみな」

「わあ……」
「私もお前もこれぐらいの頃にルシアンと会ったんですよ」

「私もお前もこれぐらいの頃にルシアンと会ったんですよ」
二人、少し遠い目をして思い出す。
懐かしいなあ、アコがまだまだ下手で俺の足を引っ張ってた——っていうか、自殺に俺を巻き込んで無理心中みたいになってた頃を。

「それが気がつけば、こうしてルシアンと夫婦になって……」
「まさかこうなるとはなあ」

「まさかこうなるとはなあ」
「まさかこうなるとはなあ」
「まさかこうなるとはなあ」

「まさかこうなるとはなあ」
「まさかこうなるとはなあ」
「まさかこうなるとはなあ」

「まさかこうなるとはなあ」
「まさかこうなるとはなあ」
「まさかこうなるとはなあ」

「まさかこうなるとはなあ」
「まさかこうなるとはなあ」
「まさかこうなるとはなあ」

「ああ、キャンプでモンスターがわおって吠えてるみたいなのですか」

「そうそう、そういうの。」「いくら対策しても難しいんだよ、オフライン主眼のゲームだと。」

「どうやら本来ソフト一本につき一つしか入っていないコードを量産した人間が居るようだ。その対策の為に一時的にコードの入力を不可能にしているようだ」

「コードが入力できないということは……」
アコはゆっくり天井を向いて、次にゲーム画面に顔を戻して、最後に俺の方へ向き直った。

その顔は疲れと落胆でふにやふにやになっていた。
「私の頑張りは何だったんですかあ……」
そんな泣きそうな顔で言われても。

俺も似たような気分だよ?」
「ルシアン、慰めてくださいー!」
「俺だって同じ被害者だぞ?」

「じゃあ私がお慰めします!」
「そういう表現すると変な意味に見えるから!」
誰かに聞かれたらどうすんの!」

「あーはいはい、さっさとログインするわよ」
「今日からは真面目にネットゲに集中できるな」
その前にほら、助けて! 俺を助けて!

「結局、買った人全員に特典プレゼントになったのね」
部室でパソコンをいじりながら瀬川が言った。
「時間制限がなくなったのでさらにゲームは売れたぞうだぞ」

「特典アイテム可愛いしねー」
ぴよんと伸びたツインテールをいじりながら、関係

「私は無事ルシアンルートを完走しましたからね」
「おお……おお?」
「ちょっと待って、完走? 俺ルートを?」

「待って待って、何がどうなって俺ルートをクリアしたことになってるんだ?」
「え? だってあのゲームでルシアンエンドを迎えたじゃないですか」
「オフラインのゲームでな!」

「もはやネットゲですらないじゃん!」
「何のイベントも進んでないのに勝手にコンプリートするなって!」
「コンプリートはしてないですよ。足りないルシアンのCGが沢山あるので、これからも二人のイベントを頑張っていこうと思ってます」

「こいつ話を通じねえ!」
普段は素直なのに、なんでこんな時だけ!
「……西村、そろそろ諦めたら?」
「やはり負け戦に見えるな」

「お前ら俺の味方じゃなかったの!」
瀬川もマスターも仲間だろ! 薄情なこと言うなよ!

「ネットゲの設定がリアルに来ることもあるんですし、私達も夫婦でいいじゃないですか?」
「嫌だ、ネットゲとリアルは別だつ!」
こんな理由で俺の一生を決められてたまるか!

抵抗する俺に見せつけるみたいに。
ゲーム機の画面には、幸せそうに寄り添う盾使いとヒーラーが映っていた。

「お前ら俺の味方じゃなかったの!」
瀬川もマスターも仲間だろ! 薄情なこと言うなよ!

「ネットゲの設定がリアルに来ることもあるんですし、私達も夫婦でいいじゃないですか?」
「嫌だ、ネットゲとリアルは別だつ!」
こんな理由で俺の一生を決められてたまるか!

抵抗する俺に見せつけるみたいに。
ゲーム機の画面には、幸せそうに寄り添う盾使いとヒーラーが映っていた。

「お前ら俺の味方じゃなかったの!」
瀬川もマスターも仲間だろ! 薄情なこと言うなよ!

「ネットゲの設定がリアルに来ることもあるんですし、私達も夫婦でいいじゃないですか?」
「嫌だ、ネットゲとリアルは別だつ!」
こんな理由で俺の一生を決められてたまるか!

抵抗する俺に見せつけるみたいに。
ゲーム機の画面には、幸せそうに寄り添う盾使いとヒーラーが映っていた。

「お前ら俺の味方じゃなかったの!」
瀬川もマスターも仲間だろ! 薄情なこと言うなよ!

ないけど、とばかりに言う。

「ゲームのキャラと同じ見た目の装備、良いですよね」
「あたしとしては見た目に偏ってるのが不満かしらね」
「お前は実利派だからなあ」

「見た目重視派のアコはごきげんだけど、瀬川はそんなに嬉しくないらしい。」
「しかしこの良くできたデザインは……今ある装備で一番良いな……」

「可愛いですけど、沢山着てる人が居るのが残念です」
ゲームの特典で、一応それなりの性能はあって、しかも見た目が可愛い。
そりや使用者は増えちゃうよな。

見た目にこだわるアコは、個性がないのも嫌らしい。
「心配はいらんぞ。特典アイテムと同じシリーズのアイテムが今度のカチャに入るようだ」
そんなアコに、マスターはあつさり言った。

「え、あれシリーズで出んの!」
「うそっ!」
「新しい装備が出るの、早くないですか?」

「特典アイテムが一番優れている時代など短い越したことはなからう」
「はっはっは、と朗らかに笑うマスター。
高い金を払って買ったアイテムが後から安く手に入るんだぞ。」


「マスターはどうして課金する理由が見つかる嬉しそうなんでしょう」
「課金廃人は新しいガチャが出たらそれだけで嬉しそうだから……」

「いいけどな、こっちはゲーム特典アイテムで随分得したからさ。」
「ま、あたしはグッズとか売れてLAが終わらないん

「ま、あたしはグッズとか売れてLAが終わらないん
「ま、あたしはグッズとか売れてLAが終わらないん
「ま、あたしはグッズとか売れてLAが終わらないん
「ま、あたしはグッズとか売れてLAが終わらないん
「ま、あたしはグッズとか売れてLAが終わらないん」

And you thought there is Never a girl online?

現在発売中の電撃 G's マガジン
10月号では
今回選ばなかったもう一つの
選択肢 **アニメ化** が読めるぞ!



次号は『やがて魔剣のアリスベル』とのコラボレーション! 9月30日発売の電撃G'sマガジン11月号と電撃G'sコミックVol.6に原作者赤松中学氏書き下ろしの小説が掲載予定!